

私の目に焼き付いている事

福村 朝子

私は戦時中、中国の大連に住んでいた。サイレンが鳴ると庭に掘った穴に隠れた。

ある日、ラジオに向かって家族が全員かしこまって座った。ラジオが訳の解らない事を言う。つまらないなと思っていたら、母がワァッと泣き出した。これが玉音放送だった。

ある夜、門の方からガンガン凄まじい音が聞こえてきた。眠っていた私は目を覚ましてしまった。ただならぬ雰囲気。大人は外の方を向いて立ったまま凍った人形のようなだった。父が母と二階に行くように言い、姉と三人で上がった。ロシア兵が土足のまま入って来た。父が、ハラショーと言ってお酒を一瓶差し出した。それで酷い事にならずに帰ってくれたそうだ。

冬の朝まだ暗いうちに起こされ、コーリャンのお粥を食べた（美味しくなかった）後、港へ歩いて行った。建物の中にはロシア兵が居て、荷物を開けさせられた。着物などを無雑作に掴んで取り上げ、身体検査もされた。私もコートを手を脱がされて調べられた。

それからが大変。雪の降り積もる中庭で何時間も待たされた。じっと立っているの
で余計に寒い。足の指が千切れるように痛い。母が「靴の先に唐辛子を入れてあるから（料理用の赤唐辛子）」と慰めてくれるけど痛い！随分長い間我慢していたけれど、「寒いっ」と言ったら涙が一粒頬に落ちた。涙が止まらない。私が泣き出すのを待っていたかのように姉も泣き始めた。あの時子ども達は皆泣いていたという。
父達は建物の中に入れてくれるようロシア軍に何回も申し入れたけれどダメだった。

ようやく入っていいとなった時はもう薄暗くて電灯が点いていた。皆がドアに殺到して押し潰されそうになった。朝暗いうちから室内に入るまで一日中立ちっぱなし。疲れていたと思うし、寒さから解放され、「ほっ」としてその後は覚えていない。眠ってしまったようだ。

次は船に乗った。貨物船だ。船底に大勢の人がギッシリ詰め込まれている。玄海灘は荒海だ。甲板に張ってあるロープに掴まりながらお手洗いに行く。船が揺れてタタッと体を左右に持って行かれ、踏ん張ってられない。

夜になって静かな時に、突然「オギャーッ」と声が船底に響き渡った。「あれっ」と思ったら、父が「赤ちゃんが生まれたんだよ」と言った。お産をする部屋はなく、白い布が下がっているだけで、その時の産婦さんはさぞ大変だったろうと、大人になってから解る。

その一方でお爺さんが亡くなった。私が丁度甲板に出ている時に見た。船員さんがお爺さんを袋の中に入れ、二人で両端を持って「一、二、三」と揺らしてドボーンと海に投げ入れた。

船が揺れた時、父が船底に下りる急な階段から落ちてしまい、肩を脱臼してしまった。酷く痛んで苦しんでいた。お医者さんはいない。そのせいで伝達事項を聞きに行けず、随分損をしたようだ。

船は舞鶴に着いた。次は汽車に乗って東京へ。都の施設である品川の高輪寮に一ヶ月程いた。

そこでは毎日午後、ドロドロの白っぽいシチューを食べた。進駐軍が残した食物を集めて大鍋に入れ火を通した物。リンゴを剥いた皮だけ分る。その皮も食べた。必ず入っていたのは煙草の吸殻だ。兵隊さんが食事の後煙草を吸い、吸い残りをお皿に

押し付けて揉み消す。それが入っている。一碗の中に必ず二、三個は入っていた。それを箸でつまんで小皿に置く。味は悪くなかった。

寮にはブラウンというとても若いアメリカの兵隊さんがいた。昼寝をしたり、大きなおならを何回もして、可笑しかったのでよく覚えている。随分後に母に聞いたら、その人がシチューを運んできてくれたと分かった。私は駐留軍に感謝しております。飢え死にしないですんだのだから。

父の肩の脱臼は、お医者さんが何人かで押さえ付けて入れた。麻酔無しなので目から火花が飛んだという。良くなるのに長くかかった。

東京足立区の引揚寮に住むことになった。長屋で中廊下は真暗、台所は共用、八畳一間に家族六人が住む。その頃亀有駅近くに、日立製作所の大きな工場があった。毎日サイレンが勢いよく鳴る。最初は空襲警報かと思いビックリ仰天し、家中に駆け込んだ。そのうち鳴っても大人が平気で歩いている。逃げなくてもいいのかな？だんだん慣れてしまった。

その年大規模な水害があった。カスリーン台風だ。見渡す限り泥水の海。お手洗から汚物が流れ出し、そこら中に浮いていた。

その最中、父が肺炎で危篤になってしまった。薬も何もない状況。祖母が舟で駅まで行き、電車で浦和の親戚宅に行き、そこのお医者さんに薬を貰って帰ってきた。そのお陰で父は一命を取り留めることが出来た。

私は母に「何でこんな所にきちゃったの。満州へ帰ろう、満州へ帰ろう。」と言った。

終戦の時は三歳。日本に帰った時は五歳一ヶ月。今は八十二歳です。

まだいろいろありますけど書ききれません。読んで下さり、ありがとうございました。